

# 私の海外見聞録

機械工学科4期 勝田勝義

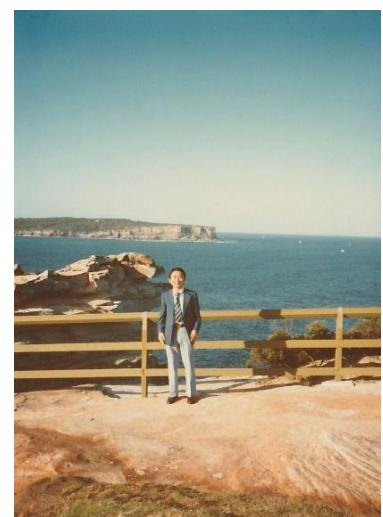
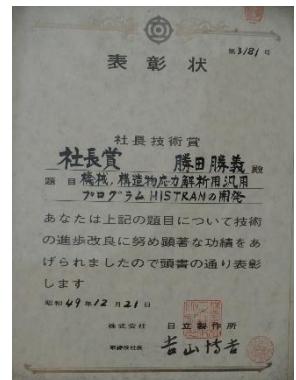
《はじめに》 奥平先生ご子息が函館をガイドしたN H K 番組を見ました。海外に開かれた箱館から函館を改めて知り、その地で5年学んだことを誇りにします。卒業して55年が過ぎ昭和なら100年、後期高齢者の新人となり、認知症となる前に、現役時に出張や駐在で訪れた海外での見聞体験をオムニバス風にしたためる次第です。「現在は過去の光に照らされて初めて充分理解できるようになる」と歴史家E H カーのことばがあります。私の見聞がその光になると毛頭考えていないが、世界に雄飛する後輩方々に参考になることがあれば幸甚です。

《1970年入社》 電機メーカーに入社し、工場のエレベータ設計部に配属された。2年間の全社プロジェクトに参加する機会も得た。覚えたプログラムのスキルは工場に戻つてからも役立つ。10年ほど経つと業務範囲はモノからコト・カネ・ヒトへと広がった。

《1976年カナダへ旅行》 初めての海外渡航でカナダへスキーに行った。20人程のツアーで羽田から直通便ではなく、米国シアトル経由となる。乗り換えまで2時間程あり、空港から外出するツアー仲間がいた。米国ビザのない私は待合室から外出禁止で、不法外国人発生防止の為、係官に監視されていた。シアトルからバンクーバーに到着し、バスでウイスラーマウンテンに向かう。車中でガイドがたばこを床に捨て「カナダはバスに灰皿はありません、バス自体が大きな灰皿です」と言っていた。

ヘリコプターで麓から滑走開始地点に向かう途中、立ちはだかる崖に衝突と思うほど機体が接近、直後に急上昇し尾根を越えて平地に着陸した。ニヤケ顔のパイロット風情からどうやら崖の上昇気流を利用した常習的芝居飛行のようだ。7日間のツアーを楽しみ顔の皮が剥ける日焼けをして帰国した。当時の円ドルレートは300円、手持ち100米ドルをレート360円に戻つたら円に両替するつもりだったが、それは二度と来ない時の流れとなつた。

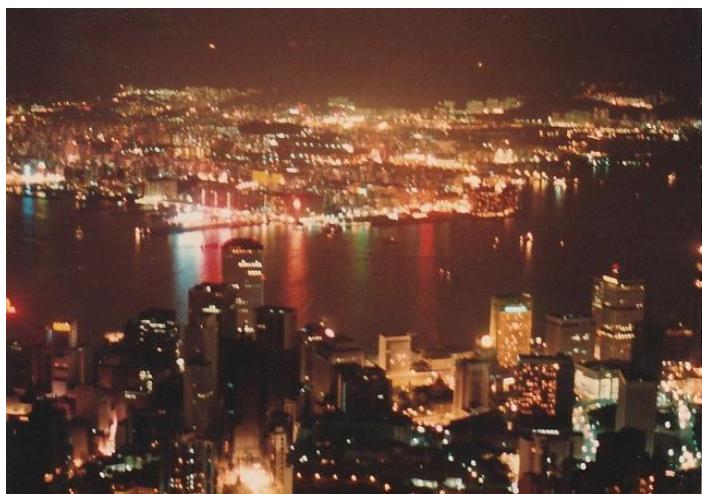
《1984年シドニーへ出張》 冬の日本から夏のシドニーに出張した。タクシーで成田空港に向かったが、空港周囲には金網柵が張られている。通行門に着くと、機動隊員からヘルメット越しに「パスポートを見せろ、トランクを開けろ」と高飛車な声で検分があり、成田闘争の影響が残っていた。シドニーでは商談帰りに現地駐在者が湾沿いのギャップパークに案内してくれた。崖上から見下ろすとヌーディストビーチに5組くらいのカップルが日光浴をしており、沖合の観光船から奇声が聞こえた。シドニータワーのレストランでご馳走になったロブスターが美味く、土産に買って成田空港で受け取つた。前日の雪が残る早朝で土産袋の紐が冷たい指に食込んで痛い。1日の間に夏と冬を体験した。



《1986年香港・マカオへ出張》 現地社員が香港島南側にあるマーケットに案内してくれた。香港では珍しい砂浜海岸で土産店が並んでいる。ある店の前で日本人とみた私に初老男が大声で話しかけてくる。現地社員通訳によると「ナカムラ中尉を知っているか？私の家族は彼に酷い目にあわされた、これがその証拠だ。日本人はこれを買う義務責任がある！」と焼け焦げた旧日本軍の軍票の束を突き出した。先の大戦中の火の粉が、戦後生まれの私に舞い落ちてきた感覚がした。

マカオのある寺を訪れた時、「寿」字の植木が目に止まり、親子三代の年月をかけて造作したという。悠久の中国とポルトガルの文化が融合している土地だった。

《1986年から4年間香港駐在》 日本はバブル景気全盛期に家族4人で4年



間の香港駐在となった。日本では設計エンジニアだが、海外駐在では肩書が2階級特進となった。設計・製造・工事・保守・情報化推進・営業技術の各部門統括責任者に任じられた。また経理財務のパソコン処理や日本から出張者の応接など、多くのことを体験した。香港を拠点の海外出張もあり、4年でパスポート4冊を使った。

以下に、駐在中の見聞体験をいくつか述べる。

《生活環境》 会社規則で生活安全面から住居が



決まり、いわゆる高級高層マンションとなった。場所は旧日本軍が渡河した北角地区の丘にある。23階のリビング窓は海面から高さ300m弱で、ハーバー夜景や啓徳空港に頻繁に発着するジェット機を見



下ろせた。3LDKで月家賃が約50万円、うち4分の1が自己負担である。駐在者の給料は現地通貨なので、日本にあるローン保険料支払いの円貨送金は、円高進行時勢で毎月増加して困

惑した。繁華街にはミニバスに乗って下り、日系百貨店で日本品を買えるが、支払いは現地貨幣で価格は日本より5割程高かった。



《教育環境》日本人小中学校と幼稚園があった。教員は日本から派遣され、数年で交代しているようだ。校庭がないので、運動会は水上レストランに近くの郊外グラウンドで行われた。ジャッキーチェンが来賓してトンボ返りを披露し、親たちはサインをもらいましやいでいた。

《日本人から來訪者》日本人観光客が月3万人、毎日ジャンボ2機分が来ていると言われ、旗を先頭に数十人



規模の団体が街を歩いていた。プライベート旅の人達もかなりいて、山縣有朋元陸軍大臣のひ孫さんも女子2人旅で来た。目と鼻のあたりが写真でみる山縣翁に似た上品な女性だった。駐在2年を経過すると一時帰国制度があり、実家の父母を香港に連れてくることにした。羽田に向かう途中、ちょうど函館駅で昭和天皇崩御の号外を目にした。

《アフター5》日本から出張者や訪問者が多く、ほぼ毎日会食が

あった。日本で政財界トップが利用する高級料亭の香港店にも出入りができた。二次会は日本語でおしゃべりできる店に行くことが多い。銀座で働いていた韓国人ママは日本サラリーマン接遇を心得ていた。店の入口に立つ姿雰囲気でどこの会社社員か分かるという。日本で流行のL Dカラオケでストレスを発散し、席で談笑する若い娘達は、韓国には仕事がないのでやむなく出稼ぎである、を後で知った。



《日曜日の公園》函館駅前広場くらいの公園に行くと大勢の女性達が座り込んでおしゃべりしている。アマさんと呼ぶフィリピンからの住み込み家政婦さんたちで、週一回の休みを朝から夕方までくつろいでいる。

《天安門事件の翌朝》6月5日の朝、マンションから下町へミニバスに乗ったが、いつもとルートが違う。運転手は「途中で止まらず終点まで直行する、そこから地下鉄で戻ってくれ」のようだ。窓から見ると街中のタクシーがアンテナに黒布を掲げ、列をなしていた。翌日出社すると社員のほとんどが年休で、抗議集会へ参加しているという。政治に無関心の習性と思っていたが、民主自由の希求はとても強い。数日後、日本領事館から日本企業へ通達、「日本政府は中国政府を支援しているので、日本国民を1日1人殺す」の脅迫があり用心を怠りなく、とあった。通勤ルートの毎日変更やアフター5休止、口ひげをはやしていたのが奏功したか、結果的に何事もなかった。

《日本人絡み事件》新聞報道された2件を述べる。①建設会社の駐在者が、日本から妻が来るので同居女性と別れようとするも、こじれて女性を殺害した。②おもちゃ会社の駐在者が、交際女性の男に殺害され、駐車場に放置の車トランクに遺体で発見された。

《香港・落馬州から中国・深圳》当時は香港と中国に国境があり、落馬州という観光地から深圳が見下ろせた。金網越しの沼地にはアヒルが泳いでいて、遠くに建物がいくつか見える農村風景だった。その深圳に香港からバスで行ける。経済特区に指定されて発展邁進中、砂埃をたててダンプカーが走っている。未舗装庭の出来立てホテルに

泊りゴルフをした。帰途に国境で土産を買うが、中国元は使えず香港ドル払いを求められる。外貨獲得に一生懸命なのだろう。その深圳が高層ビルの林立する大都市に発展するとは全く想像できなかつた。

《大連・北京へ出張》 香港から大連に出張し、飛行機の窓から地上を見ると日本なら緑が多いが、黄土が広がつ



ている。空港では預けた手荷物が土の床を手押し車に載せて運ばれてきた。日本統治時代の建物が残る円形広場では、多くの人達がラジカセで北国の春を流しダンスを楽しんでいた。ホテルの窓から見下ろす大連駅はまさしく上野駅そっくりである。2両連結トロリーバスや観光バスが走っていて、旅順港に行こうとしたが日本人は断られた。黄砂が舞ふ町だが人々に活気があつた。

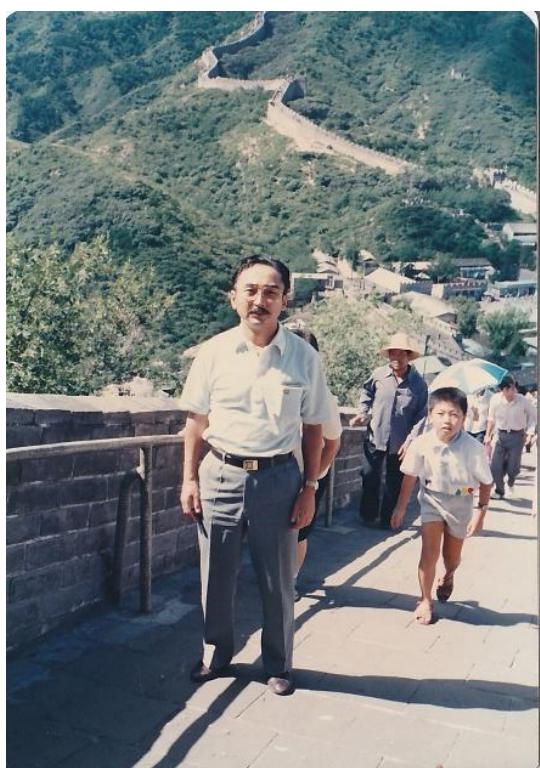
大連から

北京行

きの急行列車に乗つた。駅に切符売り場はないのでホテル従業員が入手してくれると言うので金を渡した。しかし領収書金額が切符価格の半額である。外国人に高い二重価格制は知っていたが、差額は従業員のピンハネか。後にホテルから詫び状と差額が郵送されてきた。北京に7-8時間で着くかの感覚でいたが、車窓に延々と畠が続く20時間の列車旅だった。往時、よくぞこんな広大な大地に進出したものだと嘆息した。



《北京から万里の長城へ》 北京では天安門付近へ立ち入りが規制されて



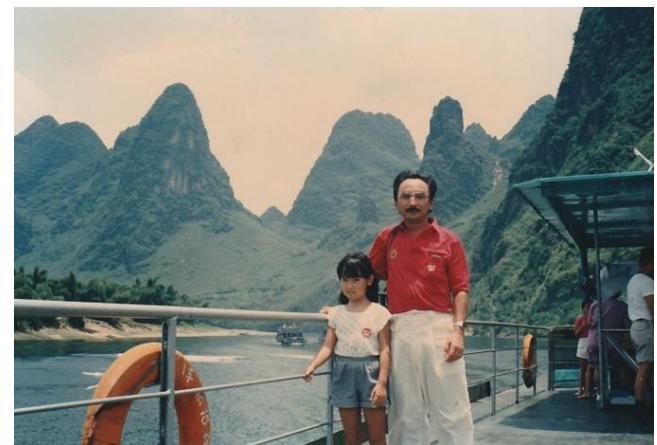
いて、天壇公園を訪れた。近くに日本人向け団地があった。北京から車で1時間程走り、八達嶺と呼ぶ長城の一角に案内してもらった。土産店もある観光地で、山の稜線から空に吸い込まれるように城壁が続いている。門から階段を上り城壁路面を歩くと、敷面レンガは磨耗していて靴底がすべりそうだ。見渡す範囲の壁面レンガひとつにつ釘で刻んだようなアルファベット氏名が落書きされていた。長年の観光客の仕業だろう。



《西安へ出張》 唐の長安と呼ばれたシルクロード基点の西安に出張した。14世紀に防衛システムとして建設された西安城壁は石とレンガの構造物で高さ 12m 幅 15m 全長 14 km という。堅固な造りで、現在は城壁路面をレンタサイクルで走っているようだ。大雁塔はレンガ造り 7 階建て、玄奘三蔵がインドから持ち帰った経典を保管した塔だが、それらは見当たらなかった。現在は観光展示があるようだ。兵馬俑では 秦始皇帝の強大な権力に圧倒される。数千体もあるという等身大の俑の顔は全て違う。奥行 100m はあるアーチ天井体育館のような建物で保護され、観覧回廊から見下ろして一周する。一般客は地面に降りて俑の傍まで立ち入りができる。後にクリントン大統領が俑と並んだニュースがあった。



《桂林へ家族旅行》 世界で最も美しいカルスト地形といわれる桂林へ家族旅行をした。洞窟では形の異なる鍾乳石や石柱を見物した。漓江下りの遊覧船では川の両岸にそびえる様々な断崖壁や奇岩を見ながら食事ができる。ゆっくり流れる川に合わせて時が過ぎる水墨画の世界を楽しめた。土産店では男が毛筆 1 本をシェンエン（千円）と売り寄り、断ると 2 本でシェンエン、5 本でシェンエン、とにかく日本円札を欲しがっていた。



《シンガポールへ出張》 シンガポールには数回出張の機会があった。何度訪れてもオーチャード通りをはじめ綺麗な街並みである。ガムやたばこの吸い殻を捨てると罰金が課される。レストランも室内禁煙で、屋外喫煙所には愛煙家が立ちたばこをしていた。果物の王ドリアンを食べたが、匂いを苦手な人もいて、食感はバナナに似ていた。車渋滞を緩和するため、奇数日は奇数ナンバー、偶数日は偶数ナンバーの車しか走れない。また午後 5 時になるとまだ明るくても、走行中の車は一斉にヘッドライトを点灯する。首相の強いリーダーシップで発展する都市国家であった。

《マレーシアへ出張》 クアランプールにツインタワーが建って間もない頃に出張した。街を走る車は日本からの輸入中古車が多い。ゴルフも楽しんだが、スライス球が飛び込んで、探す気が起きない密林だった。空港で土産に錫製品を購入したが、物価は安いと感じた。経済発展が緒についたばかりで、国民の平均年齢が若く、強い成長性を感じる国だった。



《台湾へ出張》 台北市内はスクーターが溢れていた。主婦が背に赤ん坊、ハンドルと腕の間に1人立ち、後部に



1人座り、4人で乗っている姿に驚いた。故宮博物院の入り口広場ではきびきびした隊列行動で衛兵交代中、若い兵士達の顔に汗が流れていた。蒋介石が中国から運んだ宝物品は60万点を越え、展示品を毎月千点入れ替えしても百年はかかるという。有名な翠玉白菜は、数年前に上野博物館でも特別展示されたが、観客大行列のため再会をあきらめた。

《マカオへ家族旅行》 義父母が訪港し、家族一緒にマカオへ日帰り旅をした。香港からジェットフォイルを利用すると1時間で着く。当時のマカオでは建築物に高さ制限

があり、小さい町の印象がある。マカオの歳入はカジノ産業が大半を占めている。有名なホテルを訪れ、義父と2人でパスポートチェックを受けてカジノ場に入室でき、簡単なカジノをした。別部屋の舞台には大きなガラス張り水槽があり、その中で美女が羽衣天女のように泳いでいた。

《1991年グアムへゴルフ旅》 香港駐在から帰国し、ゴルフ練習場の抽選でグアムプレー賞を得た。成田からのフライトはサイパン経由で、乗客の大半がい



わゆる卒業旅

行を楽しむ若者である。夕食後散歩をしているとガンガンと音が聞こえる。拳銃を実射できる娯楽施設からの音で、実射した人が弾丸痕のついた的紙を見てくれた。グアムやサイパンは先の大戦で多くの悲劇と犠牲をもたらした地だが、今は大勢の日本人が観光を楽しんでいる。この平和な時代に感謝しつつ、子や孫の時代でも永続せよと強く祈る。

《1996年ニュージーランドへ夫婦旅》 会社福利で勤続25年が経つと2週間の休暇取得の義務がある。「2週間



あなたがいなくても職場はなんもないから」の自覚を促す制度で、ニュージーランドへ夫婦旅行した。



約 10 時間でクリストチャーチに到着、静かな綺麗な町である。土産店にはワーキングホリディで働く日本の若者を何人も見た。後の地震で崩れる教会見物、洞窟で青く光る土ボタル、羊毛刈り実演、登山鉄道やジェットボートなどを楽しんだ。マウントクック越えのセスナ機に乗ったが、乱気流にもまれ生きた心地がしなかった。ふと思いついたのは、函館空港から函館山や駒ヶ岳の上空をセスナ機で遊覧する観光メニューだが、きっと課題が多いのだろう。

《おわりに》 海外駐在といえば「英語を話せるの？」と問われるが、「出張者には英語が必要だが、駐在者には二の次です」と答えてきました。その意味は、出張者は期限内に成果を出すべくコミュニケーションの英語は必要です。一方、駐在者は今日がだめでも、明日あさってや来月があります。英語は伝達手段であり、考え方・方法・知識・経験など、自分が何かを持っていることが先です。何かの核の多くは函館高専で培われたもので、諸先生と職員各位そして仲間たちに感謝しています。

日本を離れた体験のおかげで、複数目線の思考が育てられたように思います。例えば、日本地図で上は北海道で下は沖縄の目線から、東アジア地図で大陸側からも日本を見る目線です。後者目線により、津軽海峡に公海領域が存在する意味を分かる気がします。また、昨今の外国人排斥指向の強まりを懸念します。その人達は、海外旅行をすれば自分が外国人になる、に思考が及んでいないと思います。

いまや海外にわざわざ出かけなくても疑似体験ができます。しかし、それは誰かがカメラや I T で捉えた画面世界だ、の認識が必要だと思います。一方で、その進歩スピードについていけない自分にもどかしさを覚えます。せめて足手まといにならないよう老いを楽しみたいこの頃です。



末筆ながら、函館高専同窓皆様のご健勝を祈願します。